

「起きて、世界を変える手助けをしない？
 ホイットフィールド夫人のそよ風のような爽
 やかな優しい声が今も私の耳の中で響いてい
 る。余韻まで残す読後のこの心地よさはどこ
 からくるのだろうか」と私は考えた。

作者が最も前面に打ち出したかったのは、
 「サムライ魂」つまり、降りかかってくる敬
 々の苦難に対する万次郎の不撓不屈の精神や
 勤勉さ、潔さなどだろう。この壮大なサワセ
 ストーリーは、同じ日本人であるというだ

2

けで私にとっても誇らしい。また、それぞれ
 のエピソードが興味深く、何よりそれが事実
 に基づいているところから、ますます冒
 険心をくすぐり、ワクワク感が増してくる。
 文章だけでなく、本の中に何枚も入っている
 彼が描いたという挿絵にも釘付けになってし
 まった。

しかし、私が感じた心地よさは、それとも
 ぴったりこないのだ。この本の中にゆったり
 と流れている何か。それは、万次郎を描く著

者の眼差しでもある。著者マーギー・プロイス氏は、アメリカ人である。数奇な運命に翻弄されながらも成長していく異国の少年を、ホイットフィールド船長夫妻や友人たちと同じく、公平で優しい眼で見守っている。これが心地よさとして伝わってくるのにちがいないと確信する。もっと言うと、この本の中には包み込むような優しさや受容感のようなものが終一貫して流れているのである。

中学時代の恩師が、こんなことを話してく

れたことがあった。人が人として自立するためには、自分のことが自分で出来ることは大切だが、それよりも、困った時に「より多くの人に支えてもらうこと」ができること」が「必要だ」と。その時は、「支えてもらう」？「助ける」ではなく？と、疑問を抱いたことを覚えていいるが、今ほらそれが分かる気がする。万次郎の姿の中にもそれが見えるからだ。

ただ単に「彼は運がよかった」のでは無い。万次郎が、一つ一つの出会いに真摯に向き合

い人間関係を確かに築いていく過程、かけがえの無いその人たちとの関わり方に、私は心打たれたのだ。言葉も文化もまるで違う、偏見や差別の視線が満ち満ちた見知らぬ国で、しかも国同士に理解や信頼のかけらもなかった時代に、そんなところに放り出されたら自分に何ができるだろう……。何かしらの希望を見出すことなどできるのだろうか……。否。

しかし、万次郎にはできたのだ。人の心が織り成す愛情や友情、信頼、尊敬といった美

しい花を咲かせることだ。養父母ホイットンリールド夫妻、愛する小さなウィリアム・ヘンリー、全てを超えた無償の愛、互いを思い合う家族の絆とは、何と美しく尊いものか！ 幸せを感じつつも、万次郎には諦められないもう一つの強い思いがあった。故郷や母（家族）への思いだ。やっと手にした愛すべき家族、友人たちとの別れを決意し、命がけの帰途、決死の帰国。覚悟はしていたものの、厳しい取り調べの日々。日本人同士でありなが

ら理解し合えなはいもどかしさと苦痛にじつと耐え、やつと果たせた家族との再会の様子の描写に、私は胸が熱くなった。十四歳で漂流捕鯨船で働くなどしてアメリカで暮らし、帰国するまでの彼の十年間がどれほどの大業であつたのか、推し量る術も無い。しかし、彼の努力はもちろんであるが、万次郎の周りに、手を差し伸べた人々が集まつた。無理解や敵意をもつた人たちにさえ、支えてくれる人に変わつていった。私は、ここ

に昔も今も変わらぬ、人としての生き方のヒントのようなものを見出せる気がしている。「もつと世界を見て勉強してきたい。」そう言つて外国へ飛び出していく友がいる。そう、世界はとて小さくなつた。でも、「未来は大きな海のようにです。大きな謎です。危険もあります。けど、とても美しい。」「オポチュニティ（機会）がいっぱいなんです。」ジョン・マン、あなたが言うように、私も未来に心ときめかせ、夢と勇気をもつて進む。